

先月号では、脳梗塞にはどのようなタイプがあるのか、こういった原因でおこるのかについて説明しました。今回は脳梗塞の症状、治療、予防策などについてお話しします。

脳梗塞の症状

脳梗塞の症状という、手足が動かなくなる運動麻痺を連想する方が多いのでは

ないかと思いますが、脳梗塞の症状は脳のどの部位が障害をうけるのかによってさまざまです。人間の脳は場所によって役割分担が決まっており、右腕を動かす担当のAの部分で脳梗塞で障害されれば右腕が動かない、体のバランスをとる担当のBの部分で障害されればフラフラするといった具合に、障害された場所によって症状が異なります。具体的には、手足が動かない、しびれる、めまいがする、しゃべりにくい、言葉がでてこない、視野の左右どちらか半分が見えないなどの多彩な症状が出る可能性があります。太い血管が閉塞して脳が広範囲に障害を受けた場合や、血圧や呼吸の維持を担当する脳幹部の梗塞では、意識障害を認めます。

症状の出方も、昼間の活動時に突然生じるもの、朝起きたら症状がでてくるもの、数時間から数日かけてだんだんとはっきりしてくるものまでさまざまです。

さらに、数分から数時間だけ先ほど述べたような症状が続いたものの自然に回復する「一過性脳虚血発作」とよばれる状態もあります。これは脳梗塞の前兆であることが多く、この発作のあとも予防治療を行わずに放置すると、高い

確率で脳梗塞を発症することが知られています。たとえば症状が短時間で消えたとしても要注意の状態です。

身近な神経疾患 脳梗塞（その2）

脳梗塞の診断

病歴や症状から脳梗塞を疑う場合はMRIやCTといった画像検査を行います。状況に応じて適切な検査を選択します。脳内の主な血管の状態はMRIと同じ機械で撮影できる脳血管撮影(MRA)で調べることもできます。しかし脳梗塞発症後間もない時期ではMRIやCTでははっきりと写らないこともあるので要注意です。

脳梗塞の治療

脳梗塞を起こして間もない時期を急性期といいますが、この期間に脳梗塞に対して直接的に行う治療には次のようなものがあります。1) 血栓を溶かす薬を使う血栓溶解療法、2) 血液をサラサラにして新たな血栓を作らせないようにしたり血栓を成長させないようにする薬を使った抗血栓療法、3) 脳の神経細胞を保護する薬による脳保護療法です。これらの治療は点滴や飲み薬を使って行います。脳梗塞の原因、梗

塞の大きさ、個々の患者さんの年齢や持病、治療開始までの時間経過によって薬を使い分けま
す。脳梗塞発症後できるだけ早い段階で治療を
始めた方がより良い回復が期待できます。

合併症とその後

脳梗塞は、入院して治療が始まればもう安心、
というわけではありません。

梗塞後に脳が腫れ上がる「脳浮腫」、意識障害
や飲み込みの障害が原因となって自分の唾液が
気管にたれ込んでおこる「誤嚥性肺炎」、脳梗塞
で脆くなった血管に血流が再開したときに血管
が破れてしまう「出血性梗塞」などの合併症が
生じて、しばしば生命に関わることがあります。

また、梗塞でいったん失われた体の機能につ
いては、ほぼ元通りに近いくらい回復する場合
もあれば、脳梗塞が原因でベッド上での生活を
余儀なくされる方もいらっしゃいます。その回
復の程度を決めるのは脳梗塞の場所や大きさにも
よりますが、発症早期からのリハビリが重要
です。また、残された体の機能を十分に発揮し
て日常生活をできるだけ快適に送るために、発
症早期からのリハビリは不可欠です。

脳梗塞の予防

「こうすれば絶対脳梗塞にはならない！」と
いった予防法は残念ながらありません。動脈硬
化（＝血管が弾力を失い内側に汚れがこびりつ
いて詰まりやすくなった状態）は 40 才を過ぎ
れば程度の差はあれ誰にでもおこります。要は
その程度をいかに軽くするかです。動脈硬化お
よびすべての脳血管障害において共通したまた
最大の危険因子は高血圧です。自分は若いから
大丈夫と思っているのは大変危険です。若いう
ちだからこそ血圧の管理が大切です。また、動
脈硬化を悪化させないような生活習慣の確立
（悪玉コレステロールを増やさない、禁煙、適
度な運動、肥満防止→メタボリックシンドロー

ムの防止と同じ)が必要です。さらに、糖尿病、
高脂血症、心臓病、不整脈などの脳梗塞危険因
子をもっている方は、しっかり危険因子の治療
を続けることが予防の鍵になります。脳の血管
の通りをよくするためには、適度な水分摂取も
重要です。

太い血管に狭窄がある軽症脳梗塞の患者さん
や、たまたま頸部の動脈が動脈硬化で細くなっ
ているのを発見された方に対しては、動脈の内
側を手術で掃除する治療や、それ以上狭くなら
ないように内側に金属の管（ステント）を入れ
るなどの予防をかねた治療を行うこともありま
す。そうなる前の日頃の節制がより大切です。

一度脳梗塞になってしまった人や脳梗塞を起
こす危険が高い人には、脳梗塞の原因となる血
栓を作りにくくする内服薬を使用します。一般
には抗血小板薬が使われますが、心房細動など
による塞栓症のリスクがあるときは抗凝固療法
が行われます。

まとめ

脳梗塞は誰にでも起こりうる病気です。①動
脈硬化を悪化させない、②危険因子のコン
トロール、③水分摂取が予防のキーワードで
す。それでも症状に記したような身体の異変を
感じたら、脳梗塞の可能性ががあります。でき
るだけ早く病院を受診してください。また「今ま
で何度かそんな症状がでたことがあるけど自然
に治った」という経験のある方も脳梗塞の前兆
であった可能性があります。早く治療を始めて、
脳梗塞の発症を防ぎましょう。

終わりに

前回に引き続き池田祥恵先生に執筆を担当して
いただきました。夏場は冬に劣らず脳梗塞の発症
が多い季節です。脱水がその一番の原因です。く
れぐれも水分摂取を忘れずに。また、運動は過ごし
やすい時間を選んで無理なく行って下さい(M.T.)